

3課

7月16日

鳥かご



安息日午後 7月9日

暗唱聖句

そのことを思って、今しばらくのあいだは、さまざまな試練で悩まねばならないかも知れないが、あなたがたは大いに喜んでいる。(1ペテロ1:6、口語訳)

それゆえ、あなたがたは、心から喜んでいるのです。今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが……。 (1ペトロ1:6、新共同訳)

今週の聖句

出エジプト記14章、出エジプト記15:22～27、出エジプト記17:1～7、箴言3章、ルカ4:1～13、1ペトロ1:6～9

今週のテーマ

「^{かご}籠の中の鳥は、真昼の間や、また他の声を聞く時には、飼い主が教えようとする歌を決して歌わないものである。これを少し、あれを少しと部分的に覚えるだけで、決して完全なメロディー全体を覚えなない。しかし、飼い主が籠をおおい、その鳥に教え込もうとする歌だけが聞こえる場所に置くと、暗い中で鳥はその歌を全部覚えるまで何回も繰り返して歌い、ついに完全なメロディーを歌い出す。それから鳥を外に出すと、その後はいつでもその歌を歌うことができる。そのように神もその子らを取り扱われる。わたしたちに対しても教えようとなさる歌があり、苦悩の暗闇の中でわたしたちがそれを覚えてしまうと、その後はいつでもそれを歌うことができるのである」(『ミニストリー・オブ・ヒーリング』新装版316ページ)。

鳥を暗い場所に置くのは飼い主自身であることに注意してください。サタンが苦痛を引き起こすことを理解するのは簡単ですが、神ご自身も私たちを困惑や苦痛に満ちた試練の中に導くうえで、積極的な働きをなさるのでしょいか。

今週のポイント

聖書の中に、神ご自身がその人が苦しむことを承知の上で、そのような経験へと人々を導かれる例がありますか。神はその人たちにどのような新しい歌を歌わせようとしておられたのでしょうか。

「ファラオは既に間近に迫り、イスラエルの人々が目を上げて見ると、エジプト軍は既に背後に襲いかかろうとしていた。イスラエルの人々は非常に恐れて主に向かって叫び」(出14:10)。

あなたは今までに、^{わな}罠にはめられたり、追い詰められたり、陥れられたりしたことはありますか。時には友人たちが仕組んだサプライズの誕生祝いであるかもしれません。しかし、通常はひどくショックな、または非常に不愉快な思いをさせられるようなものです。それは学校時代のいじめや、職場の同僚からの嫌がらせであるかもしれません。

イスラエルがエジプトを出発したその日から約束の地に着くまで、「主は彼らに先立って進み、昼は雲の柱をもって導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた」(出13:21) のでした。旅のあらゆる行程で神ご自身が彼らを導かれました。しかし、神が最初に彼らを導き入れたのは、前には海が、両側には山が、すぐ後ろにはファラオの軍隊が迫る場所だったのです。

問1 出エジプト記 14 章を読んでください。神はなぜ彼らが恐怖におびえるそのような場所にイスラエルを導かれたのでしょうか。

「柱」について行くことは、必ずしも私たちに幸福を約束しません。それは困難な経験になる場合もあります。なぜなら、義の訓練は、とらえがたく病んでいる私たちの心(エレ17:9)を試みる場所へ導くからです。そのような困難の中であって、私たちが真に神に従っているかどうかを知る鍵は、必ずしもそのような試練や苦痛に遭わないことではなく、むしろ、神の教えに心を開き、私たちの思いと心が絶えず神の導きに従っているかどうかということです。

問2 この経験からイスラエルはどのような教訓を学びましたか(出14:31)。

神のすばらしい約束の数々を知っているにもかかわらず、神に信頼することが難しい時があるのはなぜでしょうか。ご自分を「信じ」「畏れる」ことを学ばせるために、神があなたを困難に導いたと思われる経験はありますか。

「主の命令により、イスラエルの人々の共同体全体は、シンの荒れ野を出発し、旅程に従って進み、レフィディムに宿営したが、そこには民の飲み水がなかった」(出17:1)。

私たちは、私たちが欲しいものすべてを神からいただくことはできないかもしれませんが、私たちが必要なものを得ることも期待できないのでしょうか。私たちが必要だと「思う」ものではなく、本当に必要なものであれば期待してもいいのではないのでしょうか。

イスラエルの民が本当に必要とするものが一つありました。それは水でした。神が雲の中から民を、葦の海を通して導き出された直後、彼らは3日間、神に従って灼熱の水のない荒れ野を進んでいました。特に砂漠では水を見つけることは命にかかわることですから、彼らの絶望感は理解できます。彼らは必要な水をいつ手に入れることができるのでしょうか。

そこで神は彼らをどこへ導かれたのでしょうか。柱はマラへと進み、少なくともそこには水がありました。彼らは歓喜したに違いありません。しかし、民が口にするとその水は苦く、すぐに吐き出しました。「民はモーセに向かって、『何を飲んだらよいのか』と不平を言った」(出15:24)。

それから数日後、神は再び同じことをされます。しかし今度柱が止まった場所は、まったく水のない場所でした(出17:1)。

問3 出エジプト記 15:22～27 と 17:1～7 を読んでください。神はマラとレフィディムでご自身について民に何を示されましたか。彼らはどのような教訓を学んだのでしょうか。

レフィディムでイスラエルの子らはどのような質問をしましたか(出17:7)。あなたは同様の問いをしたことがありますか。もしそうであれば、なぜですか。あなたはその問いの答えを得た後、どう感じ、どのような教訓を学びましたか。私たちは同じように答えを求めて、何度立ち止まるのでしょうか。

「さて、イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒れ野の中を“霊”によって引き回され、四十日間、悪魔から誘惑を受けられた」（ルカ4：1、2）。

問4 ルカ4：1～13を読んでください。誘惑に勝利し、罪に陥らないためにどのような教訓を学ぶことができますか。

誘惑が非常に手ごわいのは、それが私たちの本当に望むものに訴えかけ、常に私たちが最も弱い時に襲ってくるからです。

ルカ4章はイエスに対するサタンの誘惑の物語で始まり、非常に難しい問題へと私たちの注意を向けます。一読しただけでは、聖霊がイエスを誘惑へと導いたように思えます。しかし、神は決して私たちが誘惑されません（ヤコ1：13）。むしろ、今まで学んだように、神は私たちが試みのつばへと導かれるのです。ルカ4章のポイントは、聖霊は、サタンのすさまじい誘惑にさらされるという試練の中に私たちを導き入れることができるということです。そのような試練の中で強い誘惑に遭うとき、私たちは神に正しく従っていないのではないかという誤った考えに陥りがちです。しかし、そのような考えは必ずしも正しくはありません。「困難な立場におかれると、われわれは神のみたまが導いておられるのだろうか」と疑うことがたびたびある。だがサタンの試みを受けるためにイエスを荒野へみちびいたのは神のみたまであった。神がわれわれを試みに会わせられる時、神はわれわれの益のために達成すべきある目的を持っておられる。イエスは神の約束につけあがって自分から試みの中にとびこんだり、あるいは試みがやってきた時落胆してあきらめたりされなかった。われわれもまたそうでなければならない」（『希望への光』727ページ、『各時代の希望』上巻142ページ）。

私たちは試練によって清められるどころか、時々やけどを負ってしまうことがあります。誘惑に^{ほんろう}翻弄されたとしても、イエスが堅く立たれたゆえに私たちも再び希望を持つことができると知ることは大きな慰めです。イエスが私たちの罪を負われたがゆえに、イエスが（それが何であれ）誘惑に負けた私たちの罪の代価を支払われたがゆえに、イエスがどのような人間も経験することのないもっとつらい試練を耐えられたがゆえに、私たちは神に見放され、捨てられることはありません。それが福音です。たとえ「私が」罪人の「最たる者」（1テモ1：15）であろうと、そこに希望があるのです。

問5 1ペトロ1:6、7を読んでください。ペトロはどのように言っていますか。

ペトロは、困難の中で戦いしばしば孤独を感じていた人々、すなわち「ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地に離散して仮住まいをしている選ばれた人たち」(1ペト1:1)に宛てて書いていました。この地域は現在のトルコ西部に当たります。数節後にペトロは、彼らが「いろいろな試練に悩まねばならない」(1ペト1:6)ことを知っていると言っています。

問6 ペトロが、彼らを「離散して仮住まいをしている……人たち」と呼んでいるのはどういう意味でしょうか。このことは彼らにとってさらにどのような試練となったのでしょうか。

当時、クリスチャンであるということは、目新しいことでした。信者たちは少なく、さまざまな場所において少数派になりました。誤解されるのはまじな方で、最悪の場合には迫害されることさえありました。しかしながら、ペトロは彼らにこれらの試練は偶然ふりかかった無秩序なものではないと保証します(1ペト1:6、7)。汚れのない信仰は「いろいろな試練」を耐え忍ぶ者たちの目指すゴールです。

問7 1ペトロ1:6～9を読んでください。これらの試練のただ中にいる人々に、ペトロはどのような究極的保証を与えていますか。

彼らの試練や苦しみが何であれ、キリストがおいでになるときに彼らを待っている永遠の命に比べれば、それがいったい何でしょう。彼らに対するペトロの言葉は、私たちが直面している試練が何であれ、私たちへの神の言葉です。試練がどんなに苦しく困難なものであろうと、私たちは、私たちが最後に待っているものから目を離してはなりません。それは、痛みも苦しみも死もない新しい天と新しい地での永遠の命なのです。イエスの死によって保証されたこのような約束が与えられている私たちは、試練の中にあつてなお信仰を失わず、信仰の道を妨げるものはすべて、何であれ、主に取り除いていただくようお願いする必要があります。

ある青年がいました。仮にアレックスと呼ぶことにしましょう。彼は非常に大変な青年時代を過ごしました。麻薬、暴力、時には刑務所にいたことさえありました。しかしそこで、(アレックスが盗難を働いた) 教会のメンバーの親切によって神を知り、イエスに心をささげたのでした。彼は今でも問題を抱えており、過去を引きずってはいましたが、イエスにあって新しい人になりました。彼は神を愛し、神の戒めに従うことによってその愛を表そうとしています(1ヨハ5:1、2)。そしてついに、彼は牧師になるべきではないかと感じるようになりました。あらゆることがそれを示しており、彼は神の召しに応えようとしていました。そのことに何の疑いもありませんでした。

初めは大学での学びも順調でした。しかしその後、彼の生活に次々と予想しなかったことが起き始めました。貯金は底をつき、親しい友人は彼に背を向け、ありもしない言いがかりをつけて彼の評判を傷つけました。さらにその後原因不明の病気になります。その病気は学業にも影響を与え、ついに彼が恐れていた、退学しなければならない状況に追い込まれます。しかし最悪だったのは、激しい麻薬の誘惑と闘っていたことでした。近所に麻薬が手に入る地区があったのです。ついに彼はその地区に出入りするようになります。アレックスにはなぜこんなことになったのか、主が彼をこの大学に導かれたと信じていただけに、まったくわかりませんでした。アレックスの牧師になる決心は間違っていたのでしょうか。もしそうなら、彼の神との出会いの経験はすべて間違いだったというのでしょうか。彼の信仰の拠り所が今疑いの中に揺らいでいました。

問8 この危機的状況でアレックスがあなたにアドバイスを求めてきたとします。あなたには彼の励ましとなるような経験がありますか。聖書のどのような御言葉で彼を力づけますか。次の聖句はそのような状況で助けとなるでしょう。(箴言3章、エレ29:13、ロマ8:28、2コリ12:9、ヘブ13:5)

主に従うほとんどすべての人が、主の導きを疑うような誘惑という危機を経験したことがあるはずです。そのような状況で重要なことは、主の約束にすぎることです。過去の神の導きを思い起こし、信仰と忍耐を祈り求めることです。主は決して私たちをお見捨てになりません。私たちが主を見限ろうとする誘惑に負けないためにはどうすればいいのかが重要です。

参考資料として、『人類のあけぼの』第25章「エジプト脱出」、第26章「紅海からシナイへ」、『各時代の希望』第12章「試み」を読んでください。

「昔、主は民をレフィディムに導かれたが、忠誠を試すために私たちをもそこに導くことをお選びになるかもしれない。主は私たちを常に安楽な場所へ導くとは限らない。もしそのようにされるなら、私たちはうぬぼれ、主が助け主であることを忘れてしまうだろう。主は、私たちにご自身を現すことを願い、私たちの必要のための豊かな備えを示したいと望んでおられるので、私たちが無力であることを知り、主に助けを求めることを学ぼう試練と失望をお許しになるのである。主は固い岩から冷たい流れを湧き上がらせることがおできになる。私たちは神と顔と顔を合わせるまで、主に見られているように見、知られているように知るときまで、主が私たちのために今どれほど多くの重荷を負い、もし私たちが幼子のような信仰で私たちの重荷を主のもとに持って行っていたなら、いかに多くの重荷を喜んで負ってくださったのかということを、決して知ることはない」(『アドベントレビュー・アンド・サバスヘラルド』1903年4月7日号、英文)。

話し合いのための質問

- ① 私たちは試みを個人のことで考えますが、教会や教会の家族が集団として受ける試みがあるとすれば、どのようなものでしょうか。
- ② あなたは「安楽でない場所」を経験したことがありますか。もし再度そのような経験をするとしたら、今何か異なる対応ができるでしょうか。
- ③ 私たちを清めるために神が試練を許されることの背後にある原則を私たちは皆理解していますが、だれかが交通事故で急に亡くなるといった、価値がないように見える試練をどのように理解すべきでしょうか。
- ④ 試練に耐え、信仰に留まることができるようクラスで互いのために祈りましょう。
- ⑤ 試練に遭い、道に迷っている人を知っているなら、その人のために具体的に何ができるか、クラスで話し合いましょう。

家を捨てた父

バプテスマ式に参加したジュニオールは、自分もバプテスマを受けたいと思うようになりました。エドゥアルドは考え直すように息子を説得しましたが、無駄でした。悪霊は、ジュニオールを止めなければエドゥアルド自身も破滅すると警告し、家を出るように命じました。家を出たくなかったエドゥアルドでしたが、オリベイラが教会の行事で帰りが遅くなったある日の夜、怒りにまかせて家を出る決心をしました。もともとオリベイラが教会に行くことを快く思っていなかったのです。

翌朝、オリベイラが医療事務をしていた歯科医院に行くと閉鎖されており、彼女は失業してしまいました。どうやって夫に話そうかと考えながら家に帰りましたが、すでにエドゥアルドは家におらず、電話もつながりませんでした。クローゼットから夫の服がなくなっているのに気づいたオリベイラは、彼が家を出て行ったのだと理解しました。悪霊たちは、夫と仕事を失えば、オリベイラはジュニオールを教会に連れて行くことをあきらめると考えたのです。

3日後にWhatsAppでビデオメッセージが送られてきました。「アドベンチストの信仰とカンドンプレの信仰は同じ家で共存できない。私は決して自分の信仰を捨てるつもりはないから、お前たちもこの状況を受け入れるしかない」。そして、今は司祭としてカンドンプレの寺院に移り住んでいると言います。

オリベイラはリカルド牧師に相談し、夫がカンドンプレの司祭として働いていて、家族を捨てて家を出て行ったことを涙ながらに打ち明けました。リカルド牧師はオリベイラを慰め、聖書を開きながら、「夫のために良い妻となり、夫のために祈りましょう」と励ましました。

数週間後、家のお金は底をつきました。ここまでは悪霊の計画どおりでした。しかし、エドゥアルドの母が食べ物だけは届けるように直接エドゥアルドに頼んでくれ、ガソリン代のない親子を教会員たちが教会まで連れて行ってくれました。

2か月後、ジュニオールがバプテスマを受けられないようにするための別の計画を立てたと宣言した悪霊たちは、家に戻るようにエドゥアルドに告げ、彼の母を通じてオリベイラとジュニオールを寺院に呼び出しました。寺院に到着した2人に、悪霊に取りつかれたエドゥアルドが低く歪んだ声で話しかけます。家に帰ってもいいが、オリベイラやジュニオールが彼に聖書を教えたり、教会に誘ったりしたら「殺す」と脅しました。その日のうちにエドゥアルドは家に戻り、オリベイラは夫のために一層祈るようになりました。(アンドリュー・マクチェスニー)